

パウロ・フレイレの教育学と 日本社会意識化への可能性

国際政治経済論 ゼミ論

下川雅嗣 教授

外国語学部英語学科 4年

A0351341

氏原由実

目次

はじめに

第一章 パウロ・フレイレについて

第二章 フレイレの教育学

第一節 抑圧体制とは

- ・抑圧状況
- ・抑圧者
- ・被抑圧者

第二節 被抑圧者の教育学

- ・「意識化」の重要性 ～抑圧からの解放のために～
- ・課題提示型教育と教育者の役割
- ・銀行預金型教育

第三節 フレイレの識字教育法の例

第三章 現代日本の抑圧状況と意識化の可能性

第一節 日本に存在する抑圧構造

- ・現代社会問題から見える社会の抑圧構造
- ・被抑圧状態にある日本国民 ～2層の被抑圧者～

第二節 日本抑圧社会からの解放と「意識化」

- ・日本国民「意識化」の必要性
- ・「意識化教育」実践可能性
- ・開発援助をする前に考えるべきこと～「意識化」の理解～

おわりに

参考文献・参考資料

はじめに

一般的に、開発や貧困問題に関心のある人がパウロ・フレイレと聞くと、彼の実践した識字教育、そして識字教育と聞けば発展途上国への代表的な教育援助の一つと考える人が多いだろう。しかし実際は、パウロ・フレイレの識字教育は現行の開発援助の一つとして実践されているようなものではなく、あくまでも被抑圧者の抑圧状態からの脱出を目的とした「意識化」の“手段”として行われたのである。「意識化」とはフレイレの教育法の核であり、抑圧状態からの脱出のために、社会に対する客観的・批判的な姿勢を持つようになる過程のことである。この「意識化」による抑圧状況からの解放は、発展途上国に対して考えるだけでなく、実は現代日本社会こそ理解し取り組んでいく必要があるのではないだろうか。現代の日本社会は、貧困者・野宿者・不安定労働者・外国人労働者などが目に見える被抑圧者で、その他の大勢が彼らを抑圧する抑圧者という、一見二層の抑圧構造に見える。しかし実は、国民の大半が無意識にも日常生活の中で不自由さを抱え、社会から抑圧された被抑圧状態にあるのである。目に見えない「社会」という存在が一通りの価値観や倫理観のルールを作り上げ、多くの国民はそのルールに縛られている。彼らはそのルールに沿って走ることが正しいことだと思い込んでいるために、そのルールについていけなくなると、それを自分の能力不足だと思い込んでしまう。そして、その苦しみが現在深刻な社会問題になっている自殺、ストレス、鬱、不登校の形となって現れているのではないだろうか。そこでこのような社会からの抑圧状況から解放するために、日本社会にはフレイレの提唱した被抑圧者の「意識化」が必要となる。自分の置かれた状況を批判的に捉え、これまで意識していなかった不自由さ・苦しみを感じることで、自分が抑圧されているのだということに気づき、それが社会変革への力へとつながっていくのである。そして、私たち自身が、意識されにくい抑圧構造から解放されていくこと、またその解放に通じる社会変革を行うことは、私たち自身だけではなくもっと大きな意味をもつのではないだろうか。なぜなら、より深く社会を分析すると、目に見える被抑圧者を生み出す構造は、普通は意識されていない第二の被抑圧者を生み出す構造と相通じるものがあり、さらにこれらの被抑圧者を生み出す構造と発展途上国の貧困を生み出す構造とも本質は同じ物であるように思う。それゆえに、私たち第二の被抑圧者が解放されていくプロセスは、第一の目に見える被抑圧者が解放されることにつながり、しいては発展途上国の貧困の中にいる多くの被抑圧者の解放に通じていくのではないかと考えられるのである¹。

そこで、本稿ではブラジルの教育論者のパウロ・フレイレの思想そして教育法を紹介し、抑圧状況からの解放のための「意識化」の役割そして重要性を述べていく。フレイレは、抑圧状況を「抑圧者と被抑圧者の両者が非人間化された状況」と定義している。この状況から抜け出すためには、対話を中心とした被抑圧者の「意識化」が不可欠である。意識化

¹ これは、逆に自分たちの意識化のプロセスを経ずに行われる国内の目に見える被抑圧者や海外の貧困者への援助は、真の意味での彼らの解放には役に立たず、かえって抑圧構造を固定化する役割しか果たさない可能性も考えられる。

することによって、自分たちが置かれている状況を批判的に捉えることができるようになり、それが抑圧された社会に対して変革へ向かう力へと向かうのである。そこでFREIREは、抑圧状況からの解放の唯一の手段であるとする「課題提起型教育法」を提唱した。この教育法は成人識字教育に代表され、非識字者も多く存在し革命も頻繁に起こった1960年代以降のブラジルやその周辺国で実践された。しかし日本における現行の学校教育は、「課題提起型教育」に対して、FREIREが批判した「銀行預金型教育」に代表される。与えられた知識だけを受動的に吸収し、言われたことをその通りに行動するように教え込まれる学校教育は、抑圧社会を反映し抑圧者養成の場となってしまうている。社会そのものが国民を抑圧している状況を打開するためには、被抑圧者にあたる人々の「意識化」が不可欠である。本稿では、FREIREの思想・教育法を紹介していくことで、現代日本社会に欠けている被抑圧者の「意識化」の必要性を述べる。また最後に、発展途上国に対して抑圧構造を固定化する流れにある、現行の教育援助や開発支援に携わる人々・携わろうとしている人に対し、まず援助を考える前に、被抑圧者にとって何よりも大切なことである「意識化」とは何かをしっかりと理解する必要があることを論じる。

本稿の構成は以下の通りである。第一章では、パウロ・FREIREの人生、また活動歴を紹介することで、彼がどのように教育法を導き出すに至ったかを述べる。第二章では、FREIREの代表的著作である『被抑圧者の教育学』を参考にして、FREIREの思想、抑圧からの解放のプロセス、また具体的な教育法を紹介する。第三章では日本社会に立ち戻り、日本社会の抑圧構造を概観し、FREIREの提唱する「意識化」をどのように日本社会に適用できるかを模索していく。また、開発援助するにあたって「意識化」を理解することの重要性を述べる。

第一章 パウロ・FREIREについて

パウロ・FREIREは1921年9月19日に、ブラジル北東部ペルナンブコ州のレシーフェで生まれる。ブラジル人にとって、北東部で生まれるということは、この地方の自然条件と大土地所有制を基盤とした農業経済の理由から、飢え、渇き、過重労働、病気、貧困のなかに陥ることを意味している。しかし、FREIREは搾取される農民ではなく公務員の息子として生まれたために、ある時期まではそのような悲惨さとは無縁な環境で育てられてきた。しかし1930年にブラジル東北部を巻き込んだ空前の不況によってFREIRE一家も崩壊し、初めて飢えと渇きの悲惨を自らのものとして体験したのである。この時の経験が、その後の社会における彼の生き方を決定づけたといえる。この時FREIREは十一歳だった。

二十歳のときにブラジルのレシーフェ大学の法学部に入学して法学と言語心理学を勉強し、その後中学のポルトガル教師としての生活を開始した。そして、1944年FREIREの妻エルザとめぐり合い結婚する。その後、FREIREの関心は、成人識字教育の実践と、そのための体系的方法を築き上げることに絞られていく。1946年から54年までの間、ペルナ

ンブコ州「社会事業団」の「教育文化局」顧問として働きながら、民衆との本格的な対話を開始した。59年には、レシーフェ大学において教育哲学にかんする学位論文を提出し、その後、教育および教育哲学の教授となった。60年代初頭からレシーフェの「民衆文化運動」を組織し、独自の方法を築き上げながら識字運動を展開する。このころ、ゴラール大統領はフレイレの識字方法に理解をしめして、全面的に労働運動を押し進めていた。フレイレもまた、教育初期および「全国成人識字計画」の代表調整者として活動を続けながら、1964年に、200万人の民衆の意識化を目指して、二万人の文化サークルを建設する計画を立てていた。しかし、このような政府の積極的な方針と労働運動、農民運動、識字教育運動などの民間運動の盛り上がりに対して、ブラジルの「共産主義化」を恐れる地主や資本家および軍部は1964年3月31日にクーデターを起こし、ゴラール政権もろとも全ての運動をつぶしてしまう。フレイレもこの時に、「計画的な破壊分子」とみなされ、他の知識人や政治家とともに捕らえられた。70日間の獄中生活を経験し、その後チリに亡命する。

亡命先のチリでも、同時期に識字キャンペーンが展開されていて、フレイレの批判的姿勢はここでも活躍している。フレイレの識字方法はチリのキリスト教民主党政権下で採用され、国内の識字化の問題に大きく貢献した。フレイレ自身は、「成人教育計画省」の仕事に携わり、のちにユネスコ「農業改革訓練・研究所」の顧問となってチリ大学などで教鞭をとりながら、1964年から約5年間のチリ滞在期間中にふたつの大きな論文をまとめている。69年、チリを離れてアメリカ合衆国に渡り、ハーバード大学「教育開発研究センター」の客員教授として、また「開発・社会変革センター」の研究員として迎えられる。この時期にまとめられた論文のひとつに、筆者の中心的な参考文献である『被抑圧者の教育学』がある。その後、フレイレは活動の場をラテン・アメリカ、アフリカへと移していき自らの識字教育法を用いて、教育活動を行っていた。彼の教育理論は世界的に大きな影響を与え、各国の識字教育の実践の場で活用されている。1997年に他界する。

このように、フレイレは76年の人生をかけて、民衆の意識化を通じた“真の解放”を目指してきたのである。“真の解放”とは、「自分自身を解放し同様に抑圧者をも解放すること」ということである。そこで第二章では、その“新の解放”のために民衆はどのように意識化していったのか、また意識化のために行われたフレイレの提唱した教育法を述べていく。

第二章 フレイレの教育学

第一章では、フレイレの抑圧者に対する教育法がどのように形作られていったのか、フレイレの人生を概観しながら追ってきた。第二章では、抑圧状況は実際にどのようなものであるのか、そして民衆が抑圧状況から解放するために必要な「意識化」の重要性を論じていく。また意識化の手段としての具体的な教育方法を章の最後に紹介する。

第一節 抑圧状況とは

・抑圧状況

そもそもフレイレの「被抑圧者の教育学」は、教育の方法論について述べるために書かれたものではなく、民衆の意識化による抑圧状況からの脱却することを目的として執筆されたものであることを先に捉えておく必要がある。フレイレの本来の目的は、「抑圧状況に置かれている被抑圧者、また抑圧者自身をその状況から解放させること」にある。この解放の達成の過程では、被抑圧者置かれている現実を批判的に捉える「意識化」によって、彼らとその抑圧状況から抜け出す力になることを目指している。一般に抑圧状況というと、被抑圧者のみが人間的に豊かな生活を送ることができない状況を想像してしまうだろう。しかしフレイレの概念によると、抑圧者と被抑圧者双方に影響を及ぼしている非人間化された総体のことを「抑圧状況」と定義されている。つまり、権力を持つものが、持たないものに対する暴力・圧力によって、彼らから人間的に豊かに生きることを奪うと同時に、その抑圧状況によって抑圧者の中からも人間性が失われてしまっている状態のことである。こういった抑圧状態はあらゆるところに存在している。例えば、地主権力の強い農村社会、植民地化された状態、資本家と労働者など、このような状態では、人々は抑圧者と被抑圧者に二分化されてしまっており、両者とも非人間化されている状態にある。抑圧状況からの克服のためには、抑圧者・被抑圧者の相互の解放が必要になる。しかし抑圧者は自分の人間性が自分自身の行為によって奪われているということに気づくことは難しいため、相互解放には被抑圧者の相当の努力が不可欠なのである。

・抑圧者

このような人間性が失われた抑圧状況において、抑圧者そして被抑圧者はどのような内面的な意識を持っているのだろうか。抑圧者の意識は所有欲から成り立っている。彼らにとって金が万物の尺度であり、どんなものでも自分の購買力の対象に変えることができる、という確信をもつ。また自分自身が平和に暮らすことのみを目指しているために、被抑圧者は抑圧者にとって単なる物にしか過ぎない存在である。そして被抑圧者が多くのものを持たないのは、彼らが無能で怠惰だからだと考える一方で、抑圧者にとって警戒を怠ることができない潜在的な敵としての恐怖心も抱いている。その警戒心から、抑圧体制において被抑圧者への統制を強めていくのである。それゆえ抑圧者の意識には、他者や民衆の人間化というものが豊かな人間性の追及を意味するものではなく、この築き上げられた抑圧の秩序の破壊としてしか映らないのである。

・被抑圧者

一方被抑圧者の意識においては、実存的二重性という特徴を持っている。この「二重性」とは、自分自身とは別に内面化された抑圧者のイメージのことを指す。つまり被抑圧者の中に抑圧者が宿っている状態のことである。このような状態において被抑圧者は、抑圧者の支配のもとに生きるという依存状態に陥る。それゆえ、抑圧者からの自由を求める一方で、同時に自由を恐れるという「自由への恐怖」を抱く。また被抑圧者は、その二重性へ

のいらいから、自分の同胞を攻撃することによって、間接的に抑圧者をも攻撃するのである。さらに皮肉なことに、内面化された抑圧者また彼らの生き方に対して、憎しみどころか願望を抱くようになってしまう。そして、抑圧者の被抑圧者自身に対する評価が同時に内面化されているため、自分たちは役立たず、無知、不健全、怠惰、非生産的だ、といったような自己卑下に陥る。こういった被抑圧者のもつ負の意識から抜け出すためには、自らの内側の意識の発見、そしてそこから見出される自分たちの置かれている状況の起因の自覚が必要である。これをフレイレは「意識化」と呼び、抑圧状況からの解放のために欠かせないものと位置づけている。被抑圧者の現実世界の意識化によって始めて、被抑圧者と抑圧者両者が非人間化された抑圧状態から抜け出すことができるのである。第二節では、こういった抑圧状況からの解放のために実践された意識化の必要性と、意識化のために実践されたフレイレの教育理論を述べていく。

第二節 被抑圧者の教育学

抑圧状況からの相互解放を目指すためには被抑圧者の意識化、つまり抑圧状態への批判的精神から抑圧状況を変革したいという願望を持つこと、が必要であるとフレイレは主張している。そしてその実践のためには、教育者（『被抑圧者の教育学』の中では革命指導者と書かれている。）と被抑圧者のとの永久的な対話関係を作り上げるための人間化の教育学を手段とする。フレイレはこの共同志向の教育の実践こそが、抑圧からの相互解放の唯一の方法だとしている。第二節では、抑圧状況からの解放のために必要な被抑圧者の「意識化」の重要性と、そのための手段とされた「課題提起型教育」を教育者の役割と共に紹介する。また、逆にフレイレが批判した「銀行預金型教育」がどのように抑圧社会を生み出すのか検証する。

・「意識化」の重要性

前節でも述べたように、抑圧状況とは抑圧者・被抑圧者共に非人間化された状態を指す。その状態からの解放には、被抑圧者が自分たちの置かれている抑圧状況と、自分たちを苦しめている抑圧者の存在を発見することが第一に必要である。この過程を「意識化」とフレイレは定義している。また、その「意識化」の結果が、“現在の状況を変革したい” また “抑圧からの解放のために闘わなければならない” という被抑圧者の確信・決意となって表れる。そして、被抑圧者は解放のための闘いの行動の主体として全責任を受け入れるようになるのである。その被抑圧者の「意識化」のためには、教育者は被抑圧者と共に、お互いの信頼関係の上で、行動を前提とする批判的な対話を続ける必要がある。対話によって、被抑圧者の依存を自立へと変えていくのである。次に、その対話を通した「意識化」のための手段としてフレイレが提唱した「課題提起型教育」を紹介する。

・「課題提起型教育」と教育者の役割

フレイレが抑圧状況からの相互解放のための唯一の手段として提起したものが「課題提起型教育」である。この教育法においては、教育者・生徒両者とも対等な学ぶ主体であるため、どちらかが一方的に語りかけるといった形はとらない。そこでフレイレは「対話」をこの教育法の最も重要で不可欠な要素としている。生徒間、生徒と教師間、また教師間の対話を通し、生徒の身近に起こっている現実を認識することによって、彼らが今現在置かれている現実を批判的に捉えることができるようになる。次に述べる「銀行預金型教育」のように認識対象が生徒の生活からかけ離れたものではなく、生活に直接関係した現実の状況であるために、それを批判的に客体化することによって、自分たちの現実に対する新たな理解・挑戦へ繋がるのである。そしてそれが抑圧状況からの脱却・解放への可能性となる。また、この「課題提起型教育」は教育指導要覧のようなものによって決まりきったものではなく、実践の中で絶えず作り変えられていく変動性のあるものである。

このような「課題提起型教育」の実践においては、教育者（指導者）の役割は極めて重要になってくる。教育者の役割は、被抑圧者そして学習者である民衆の見解や教育者の見解について民衆と対話することである。しかし、ただ被抑圧者に救いのメッセージをもたらすのではなく、彼らとの対話を通して、彼らが置かれている客観的状況とそれについての自覚を促すことが教育者の真の役割となる。ここで気をつけなければならないのは、教育者は民衆を巻き込むことを目標とするのではなく、彼らの奪われた人間性を回復するために“民衆とともに”活動することにある。また学習者ひとりひとりがそれぞれ異なる経験・知識・意見などを持っていることを尊重し、被抑圧者である民衆の実際の必要と彼らの自発的意思に従わなければならない。民衆とともに学ぶ協力者としての尊敬、強い信頼感、謙譲的な態度の三つの要素があって始めて民衆との相互の対話が生まれる。また、行動の対象は学習者自身ではなく、教育者が他者とともに変革すべき現実そのものであり、教師と生徒の間の対話の内容こそが教育プログラムの内容となることを理解しなければならない。その内容とは、教育者が、学習者がさらに知りたいと思っている事柄を、組織立て、系統付け、発展させて諸個人に再提出することによって作り出される。それによって対話を生み出し、相互の学びあいを促進するのである。このように教育者の被抑圧者に対する態度や教育法が「課題提起型教育」では重要な役割を担っている。

・「銀行預金型教育」

抑圧状況からの解放の手段である「課題提起型教育」に対して、逆に抑圧社会を生み出すとして、フレイレが批判するのが「銀行預金型教育」である。この教育法は日本の学校教育に代表される。日本の学校教育において、子供に対して行なわれる教育は、子供が成人した時に必要と思われることを教員側が選択して教えている場合が多い。このような教育のもとでは、一方的な語りかけによって、生徒を語りかけられる内容の機械的な暗記者にしてしまう。フレイレは、こういった教育の方法を預金行為に例え、生徒が金庫で教師が預金者であるため、「銀行預金型教育」と呼び、人間を非人間化する教育として批判して

いる。この教育法は抑圧社会を全面的に反映しており、人間を順応的で管理しやすい存在としてみなし、被抑圧者を社会へ組み込むことを目的としている。そして、抑圧者は抑圧型の社会構造を保つために銀行型教育概念を利用し、生徒の意識化を避けるのである。また、「銀行預金型教育」においては、生徒の生活に密着していないものが主に認識対象となる。被抑圧者である生徒が置かれている現実世界はその他の多大な知識によって覆い隠されてしまうために、教師から教え与えられるものを唯一の正しいものだ、と宿命論的に考えるようになってしまうのである。それゆえ被抑圧者は自分自身が置かれている現実世界を批判的に捉えることができずに、いつまでも抑圧状況の中の依存状態から抜け出せないのである。

第三節 フレイレの識字教育法実践例

第二節で述べてきた思想・教育法からわかるように、フレイレが実践してきた識字教育の目的は、文字の読み書きが実際にできるようになるという技術的な面以外に、より重要な現実の社会の状況や自分と社会の関係が分かるようになる「意識化」にある。被抑圧者は自分の周りの状況や関係を理解するために、文字を覚えることを手段とした。そこで、自分たちがおかれている状況を認識し、規制の社会構造を越えて、新しい社会を想像する行動へと結び付けていくのである。このように出来上がった「沈黙の文化それ自体の胎内から生み出される教育理論」から、第三節ではフレイレの教育が実際どのような行なわれていたのか、彼の識字教育の方法の一例を紹介する。

<文化サークル>の組織

まず、文字を知らない民衆と対等な関係に立つ教育者が民衆の中に入り、三十人程度の<文化サークル>を組織する。そこでは人類学的文化概念を主題とする討論が行われる。例えば、自然と文化の相違・人間同士の関係と交流において、自然が果たす媒介機能・人間関係のもつとりわけ重要な意味などがテーマとなる。そしてこれらのテーマは、それを表現する十の場面を絵によって学習者である民衆の前に提示される。これをフレイレは「コード表示」と呼んでいる。これらの場面についての討論と対話を経て、文化サークルの参加者たちは、自分たちがなぜ今まで文字を知らずにいたのか、なぜ文字を知ろうとしなかったのかを批判的に考察しながら読み書きの学習に対する意欲を高めていく。この段階で初めて、具体的な文字の学習へと入っていくのである。この学習法における読み書き学習とは、言葉の暗記や文字の反復練習といった機械的な方法ではなく、民衆が置かれた状況そのものを表現するために、民衆の言語を民衆の識字学習の対象とする。この文化サークルの形成において、識字学習の第一段階になる。以下にその後の文化サークル内での教育段階を示す。

教育者は民衆とのなげない会話のやりとりを通して、民衆の間に広く用いられ、民衆の生活と労働の現実に密接に結びついている言葉や言い回しを選び出す。

集められた語句の中から、とくに音節が豊かで発音が難しく、民衆の日常経験から切り

離しえない言葉が、〈生成語〉として抽出される。例えばそのような生成語のひとつに、「スラム」がある。当時「スラム」という語を選択するという事は、貧困と飢餓が蔓延していたブラジルにとって、まさに日常そのものである最大の矛盾を、学習者がまるごと抱え込むことを意味している。

これらの〈生成語〉が表している具体的な状況が、絵や写真やスライドとしてコード化される。これを〈コード表示〉といい、現実についての具体的な場と理論的な場とを媒介するだけでなく、教育者と学習者とを媒介する、という二つの機能を持っている。例えば「スラム」についていえば、まず民衆の生活現実そのものであるスラムが、絵や写真などによって表現され、そのなかに「スラム」という文字がおかれる。この過程によってスラムが単なる民衆の現実そのものだけではなく、理論的な検討と批判を加えるために文化サークルという場において抽象化されたひとつの表現となる。

第四段階では教育者はそれぞれのコード表示に応じていくつかの課題を設定する。これらの課題は、コード表示を見ながら民衆が行う討論と対話のなかで、民衆にたいして提起される。「スラム」のコード表示の場合、住宅、食糧、衣服、保健、教育などの問題が論じられるべき課題として設定され、民衆に提起される。ここで都市のスラムを課題にするということは、直接にブラジルの大土地所有制に支えられた農村における搾取と収奪を問題とすることにもつながってくる。

第五段階では、「スラム」などの生成語だけが取り出され、その分解と再構成が行われる。そこでスラムの絵が消え、「スラム」という音声が消えてしまっても、民衆はそれらを表す文字が残っていることを発見する。このようにして民衆は、文字を獲得することと、現実世界を読み取ることを同時に体験するのである。

このように、文字の獲得と同時に現実世界を読み取り始めた民衆は、今まで自分たちを文字のない世界に閉じ込めてきた真の原因が何であるかを、はっきり認識するようになる。もはや民衆は、抑圧者によって踏みにじられていた客体ではなく、自分自身の言葉を武器としながら、自然、社会、文化に対して働きかける、積極的な主体となる。このように、フレイレの識字教育によって多くの被抑圧者が文字を獲得し、それによって彼らは現実世界との自分たちの関係性を理解することができ、社会変革への力となっていったのである。フレイレの識字教育は抑圧状況からの解放のための、「意識化」の有効な手段だったといえる。

第三章 現代日本社会の抑圧構造と意識化の可能性

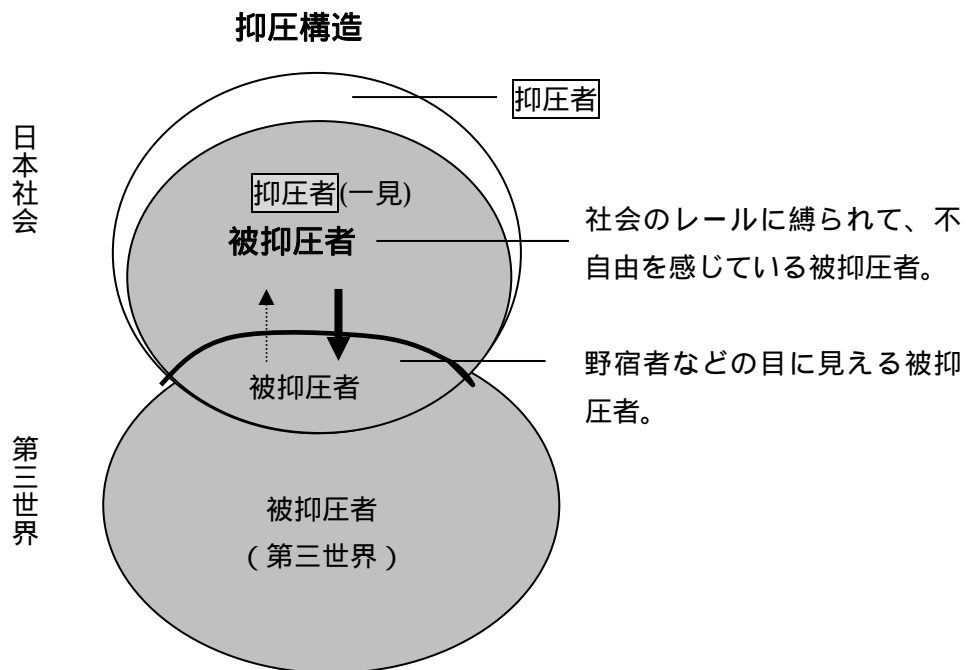
第二章では抑圧状態から脱出することを目的とした、フレイレの教育理論・思想、そして実際に実践された識字教育を追ってきた。被抑圧者が自分たちの置かれている抑圧状況に気づき、その状況を主体的に変えようとする「意識化」こそが、抑圧からの解放にとって重要な役割である、とフレイレは主張している。そこで第三章では、様々な現代社会問題を生み出している日本の抑圧社会構造を検証し、その構造の下にいる被抑圧者の実態を

述べていく。そして第二節では、フレイレの提唱する「意識化」の日本社会に対しての必要性と、開発援助を考える際にまず理解すべき点であることを論じる。また「意識化教育」として具体的にどのような実践の可能性があるか模索する。

第一節 日本に存在する抑圧構造

・現代社会問題から見えてくる社会の抑圧構造

現代日本社会は新自由主義の流れによって、経済的に豊かになるためにますます競争が激化している。貧富の格差は広がり、野宿者・不安定労働者・外国人労働者は増加し、社会の底辺へと押しやられる。このような人たちは日本社会における目に見える被抑圧者である。一方で、競争社会に参加し、社会のルールに乗っているその他の人々は抑圧者とみなされる。このように、一見日本社会は勝ち組・負け組みに二分化された抑圧構造に見える。しかし、目に見える被抑圧者以外の人々は本当に不自由なく心から満足して生活しているのだろうか。年間三万人の自殺者・ストレス・鬱・不登校などは、この社会構造において社会が築き上げたルールに乗ろうとしても乗り切れないような人々の苦しみの表れなのではないだろうか。日常生活において“不自由さ”を感じている多くの国民は、本人も気づかないうちに被抑圧者とされているのである。このように、日本社会は二重の被抑圧者が存在する社会なのである。日本の抑圧社会構造を以下の図に表す。この図に表されているように、日本社会は少数の抑圧者と、大多数を占める二層の被抑圧者からなる抑圧構造をしていることがわかる。この二層の被抑圧者を生み出す原因の元をたどると、同様の社会の抑圧構造が根底にある。仕事や生活への不自由さ・行き詰まりを感じている第二の被抑圧者、経済的に貧しくなり、最終的に貧困へ陥ってしまう第一の被抑圧者、というように、日本の抑圧構造そのものが二層の被抑圧者を作り上げているのである。また、目に見える被抑圧者から見た社会の壁は分厚いために、一旦底辺まで行ってしまうと、そこから這い上がるのは大変厳しい。一方で、その他の社会の大多数の国民を占める被抑圧者と同時に抑圧者は、リストラや病気など、なんらかの原因で突然底辺の被抑圧者の位置に陥る可能性がある。さらに、日本社会の抑圧構造の外では第三世界とも繋がっており、第三世界に存在する貧困などの被抑圧状態を生み出す構造は、日本の抑圧構造とも深く関係しているのである。



図：筆者作成

・被抑圧状態にある日本国民 ～二層の被抑圧者～

このように日本社会は二層の抑圧構造をしているが、目に見えない被抑圧者の中では、実際に自分が被抑圧者である、ということに気づいてない人が多くいるようにみられる。普段の生活の中で、ふとした時に不自由さ・不満を感じたことある人は大勢いるだろう。その“不自由さ”そのものが被抑圧者であることの表れなのである。例えば、若く可能性に秘めた学生時代を受験戦争や就職活動に費やさなければいけないことに疑問を感じたことはないだろうか。“成績は良くなければならない。”“仕事をしている人は偉い。”“常に頑張らなければならぬ。”“いつでも明るく笑顔でいるべきだ。”などといった、一見正しく当たり前のように見える社会の暗黙のルールに縛られていないだろうか。たいていの人はそれが当たり前だと思い、社会に暗黙に決められたルールに乗って、少しでも先頭に近づこうと努力している。学校教育もこの抑圧社会構造をそのまま反映しており、一方的な知識を植えつけ、いい高校いい大学、そしていい就職先へ進むことが正しい道である、ということが無意識のうちに刷り込んでいるのである。しかし、社会にはこの一通りのルールに完璧に当てはまり、不自由なく進んでいける人は一握りであり、多くの人はいずれの時点で不自由さを感じているだろう。そしてその不自由さ・不満が消極的な形で現れたのが現在の社会問題ともなっている、ストレス・自殺・鬱・不登校などである。最近では凶悪殺人事件も多くなってきているが、これもルール社会に対して不自由さを抱いた被抑圧者の不満が、殺人という形になって現れたものなのではないだろうか。

第二節 日本抑圧社会からの解放と「意識化」

第一節で述べてきたように、日本社会では目に見える人たちだけではなく、実は大多数の人が被抑圧者として不自由に生きていることがわかる。野宿者などの目に見える被抑圧者に対しフレイレの「意識化」を行い、社会変革を目指すことは、抑圧から脱出するための壁があまりにも分厚いために難しい。たとえ彼らが社会に対して苦しみを訴えているとしても、その声は無視されより抑圧が強くなるだけである。そこで、第二節ではまず第二の被抑圧者に対しての「意識化」の必要性とその実践可能性を模索していく。また、開発援助をするにおいて、実際に援助を行う前にこの「意識化」という概念をしっかりと理解した上で、開発援助の本質を見直していく。

・日本国民「意識化」の必要性

第一節で述べたような日本社会に根付く抑圧構造を変革するためには、被抑圧状態にある大多数の国民の「意識化」の必要性を主張する。まずその「意識化」のためには、自分自身が被抑圧者であることに気づかなければならない。自分自身の生活や仕事・学校などでの出来事や自分自身との関係をゆっくり考え見直すきっかけがあまりないために、今自分の周りで起こっていることは、こういうものだ、と疑問に感じることなく受け入れてしまう。うまくいっているときは、それで何とかなってしまうかもしれないが、何かのきっかけで失敗・挫折をした時、大きな打撃を受け、自分はこの社会の敗北者のような気分になってしまう。個々人の人生には失敗も成功も存在しないのにもかかわらず、社会のルールが全ての基準となっているために、そのルールからずれてしまうことが彼らにとっては失敗を意味するのである。このような社会的被抑圧者がこの抑圧状態から解放されるためには、フレイレの提唱した「意識化」が必要とされている。フレイレも述べたように、まず自分自身の置かれている状況、そして自分の生活と実社会との関係性を客観的・批判的に見直し理解することが不可欠である。それによって、自分たちがどれだけ不自由な状態に生きているのかに気づくことができる。またその“気づき”が、問題意識が生まれその解決に向けて自ら行動する、という主体性へとつながるのである。そして徐々に同じような境遇の人が集まり、その不自由さ・不満を共感することによって、その変革行動の規模も大きくなり、社会変革への力となる。そして、第二の被抑圧者の解放のプロセスである「意識化」によって、同様の抑圧構造から生み出されている第一の目に見える被抑圧者、第三世界の被抑圧者への解放、そして国内外の社会変革へもつながっていくのではないだろうか。

また、もう一つの社会変革の可能性として、Compassion（共に感じること）が考えられる。これは自分が被抑圧者の立場でなくても、彼らと同じ目線に立ち、彼らの苦しみを共に感じることで、彼らと共に現実に立ち向かうきっかけになる、というものである。例えば、もし自分の親友や愛する人が苦しんでいたとしたら、自分も同じようにその苦しみを感ずることがあるだろう。それと同様に、被抑圧者の立場に立って、彼らの痛み・不自由さを身をもって感じ、その友人としての彼らを痛みから救うために彼らと共に行動を起こすことができる。

このように、日本国民の「意識化」によって、より多くの人々が自分の生活、そして社会全体を客観的に見つめ直し、普段意識をしていなかったことに問題意識を抱き、そこから問題解決への行動へつなげること、そして被抑圧者の苦しみを共有し彼らと共に行動することが、被抑圧者の抑圧状況からの解放のために、必要なのではないだろうか。

・「意識化教育」実践可能性

それでは、この日本社会において実際どのように「意識化」を進めることが可能なのであろうか。自分が置かれている状況に対して不自由さや不満を感じてはいるものの、それは自分の能力不足によるものだと考える人、またその不自由さに気づいてさえいない人が大勢いるように見える。そのような人に対してまず必要なことは、普段の生活の中で自分が“不自由だ”と感じたことを無視せずに、なにがそう感じさせているのか、どこに原因があるのか、と考える習慣をつけることである。そしてその生活の中の不自由さ、喜び、問題点、など感じたこと、気づいたことなどを仲間と分かち合いを続けることによって、不自由さからの解放の道を皆で一緒に探し求めていく、といった方法がある。一つの例として、下川教授が以前実際に行った「意識化教育」を紹介したい。それは「この指とまれ」と呼ばれ、日本社会の中で、より生き生きと喜びをもって生活できるようになるように、様々な不自由さからの解放の道を皆で一緒に探し求めていくことを目的としたものである。毎回社会で働く男性・女性で集い、あらゆるテーマについて話し合い、お互いにそれぞれの生活の中で感じたこと・気づいたことを分かち合う。テーマのいくつかを挙げると、「あなたの能力や経験とは関係なく、このままで『自分には価値がある』と実感したことがありますか。それはどんな時でしたか？」や、「毎日の生活と職場を振り返ってみて、あなたがNOといえない時は？具体的な場面を思い出して答えてみてください。」のように、彼らの生活に密着した具体的な質問について考え、感じたことをいい合う。これによって、普段あまり意識していなかったことに気づき、また同じようなことに悩み・苦しんでいる人がいることを知ることができ、個人として、共同体として、自分たちにとって住みやすい社会を作り出す原動力になるのである。このように、身近に社会の中で働き、生活している人たちに対して、「意識化教育」は可能なのである。始めは規模は小さいかもしれないが、継続的に行うことによって、同じような悩みを抱えた人たちは確実に増え、共同体として社会変革への力になる可能性も十分にあるのではないだろうか。

・開発援助をする前に考えるべきこと～「意識化」の理解～

最後に、これから開発援助に携わろうとしている人、被抑圧者へ援助をしたいと思っている人に向けて、「意識化」を理解することの重要性について述べる。従来途上国への援助、特に教育援助は、先進国の発展のルールをそのまま発展途上国に当てはめるような形で行われている。物質的・経済的に豊かになり、貿易などで国際社会に進出することが唯一の発展の道であるかのように促している。「先進国」という名詞にも表されているように、

「先進国」は常に他よりも先進している、逆に「発展途上国」は「先進国」のようになる発展過程にいる国と位置づけられている。この定義に沿って開発援助を続けていけば、世界の貧困・格差は一生なくなるわけがない。抑圧者である先進国、被抑圧者である発展途上国という抑圧構造は固定されてしまっている。それが現行の開発援助にもそのまま現れてしまっており、特に教育・経済発展などにおいて、発展途上国は先進国を見習うように仕向けられている。例えば、識字教育において誤解されやすいのが、識字教育を受けることを望む人たちは、決して文字の習得を最大目標としているわけではない。かれらは文字を通して、自分たちの置かれている状況を理解し、貧困状態を脱出するための手段として文字の習得を行うのである。しかしほとんどの識字教育においては、文字の獲得を第一目標にし、次に知識・技術の習得といった先進国で行われている教育内容が植え込まれていく。これでは世界の貧困の解決に向かうどころか、抑圧構造の固定化をしているに過ぎない。自分たちの価値観を他の人に押し付けることで、自分たちの先進性を確認しているのである。そこで、他国に対して物質的・一方的な援助を考える前に、被抑圧者の抑圧状況からの解放にはなによりも「意識化」が必要である、ということを理解しなければならない。しかし、頭の中で理解するだけではなく、自分たち自身が「意識化」のプロセスを経験して初めて、本当の意味の「意識化」は理解できるのである。その経験が伴った理解を持ってこそ、第三世界の人々に対して「意識化」を働きかけることができる。

このように、「意識化」のプロセスを経て本当の意味で抑圧状況から解放されることによって、被抑圧者は外からの価値観に縛られることなく、一人の人間として自由に生きていくことができるのである。一方的な援助で決して貧困は解決しない。被抑圧者である人々当事者が、彼らの暮らし中で不自由さ・苦しみを感ず、それを変えたいと思うことこそが、「意識化」のプロセスであり、抑圧状況からの解放へとつながっていく唯一の道なのである。そして、日本社会における被抑圧者自身が「意識化」のプロセスを辿り、抑圧状況の根付いた社会を変革する力となることを、身をもって経験して初めて、第三世界に対しても「意識化」のプロセスを推進することができ、抑圧状況からの解放に携わることができるのではないだろうか。

おわりに

パウロ・フレイレの教育法は、文字も持たなく抑圧状態に追いやられた人々に対して革命的な影響を与えた。読み書き能力だけでなく、世界を知るための手段としての識字教育によって、被抑圧者は自分と世界のかかわりを知ることを始め、批判的な意識を持つことができるようになる。その意識化によって社会に対して変革を働きかけ、抑圧者ともに非人間化された抑圧状況から抜け出すことができるのである。そして、根深く複雑な抑圧状態にある日本社会こそ、このフレイレの提唱する「意識化」が必要とされている。日本社会には、野宿者などの目に見える被抑圧者と、社会のルールに縛られていることの不自由さを感じている被抑圧者が存在する二重の抑圧構造をしている。後者の被抑圧者は国民の

大多数を占めているが、そのうちの多くの人は自分が被抑圧状態にあることに気づいていない。日常生活の中で感じる“不自由さ”を見過さず、そこから自分が被抑圧者であること、社会が抑圧構造の下にあることを意識することで、彼らにとってより住みやすい社会へと変革する原動力になるのである。また、この「意識化」のプロセスは、日本社会だけにおいてだけでなく、貧困などに苦しんでいる第三世界の被抑圧者の自立的発展においても不可欠のものである。物質的・一方的な押し付けの援助では、抑圧状態からの解放は不可能であり、彼らに必要なものは「意識化」のプロセスである。そして開発援助を考える上で、まず自分たちがその「意識化」プロセスを身をもって経験し、理解した上で初めて、他者へ実践できるものである、ということを理解する必要がある。このように、日本社会の二重の被抑圧状態の解放にとどまらず、世界中にはびこる抑圧状況からの脱却のためには、パウロ・フレイレの提唱した「意識化」が必要とされているのである。そして、その効果的な実践方法をさらに模索することが筆者自身の課題である。

<参考文献>

- Paulo Freire (1979) 「被抑圧者の教育学」小沢有作 楠原彰 柿沼秀雄 伊藤周訳、
亜紀書房。
- Paulo Freire (2001) 『希望の教育学』里見実訳、太郎次郎社。
- 岡本薫 (2006) 『日本を滅ぼす教育論議』講談社現代新書。
- 開発教育推進セミナー (1997) 『新しい開発教育のすすめ方 地球市民を育てる現場から』
古今書院。
- 特定非営利活動法人 開発教育協会 (2005) 『開発教育ってなあに？開発教育 Q&A 集』。

<参考ウェブサイト> (4月14日参照)

DEAR 開発教育協会ホームページ

<http://www.dear.or.jp/>

開発教育とは何か(田中治彦先生ホームページ)

<http://www.rikkyo.ac.jp/~htanaka/98/Kaikyo.html>

国際ボランティア NGO - NICE - あなたにもできる国内・海外ボランティア

<http://nice1.gr.jp/>